親を殺し損なった、子供

jinxx.

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
親を殺し損なった、子供

【Ｎコード】
Ｎ２７８３Ｐ

【作者名】
ｊｉｎｘｘ．

【あらすじ】
私は六歳で、父を殺す計画をたてた。

第一章

子供の頃、白雪姫が嫌いだった。なんで、毒林檎で死なないのだろう。王子のキスで目を覚ますとか、全くウザい女だ。そもそも、気持悪い小人に囲まれて過ごしてるキモい女に、王子様が現れるとか普通ないでしょ。

私は子供の頃から、胡散臭いおとぎ話が嫌いだった。と、いうより空想の物語が嫌いだった。何故なら、それらの本で夢の中を彷徨ったとしても、母が躾と称して私を上履きで殴った瞬間に、現実の世界に引き戻される。その熱を持った太股が、夢の空しさを教えてくれる。

私に夢を教えた、それらの本を憎んだ。知らなければ現実の忌まわしさをそのまま受け入れて、強く無感動に生きられたのかも知れない。しかしまんまと夢に憧れた私は、現実の痛さに泣いた。

息子が父親をバッドで殴殺したり、起き抜けに娘が包丁を父親の心臓に突き刺したりする。そんなニュースをテレビで観る度に、思った。私は何故、彼等と同じようにしなかったのか。子供に殺された親は、私の親と比較して全くノーマルであるのに。異常な親に育てられた私こそ、殺人犯にぴったりなのに。

どうしても解せない。私がこうして普通に生活を送っていられるのが。四十を過ぎた今でも、いや、今だからこそか。彼等が私の心に焼き鏝で押した火傷の跡が、グジュグジュと膿んで、時にどうしようもなく私を怒らせるのに。その怒りを抑えられずに、肩が触れただけの通行人を刺し殺してしまいたいのに。

子供の私を殺人犯にしなかったのは、異常に高いプライドだ。複

雑な家庭環境にある者が、非行に走る。その鬱積したストレスのありきたりな発散方法を、私のプライドが許さなかったのだ。それと残念なことに、完璧な犯罪計画が思いつかなかったから。

実家の前は急な坂になっており、父親の車のブレーキを切ったらそのまま壁に激突。車が炎上して、父は死ぬのではなかろうか？六歳の私が考えたにしては良いアイデアだった。保険金が下りたら、浪費家の母に成り代わって私がお金の管理をしよう。

しかし、そのアイデアには一つ問題があった。私は、ブレーキの切り方を知らなかったのだ。では何故、激情に任せてバッドを振り上げるなり、庖丁に手を伸ばさなかったのだろうか？実は庖丁は握ったことはあるが、それで切りたかったのは自分の手首だった。しかし、私は手首を切りつけることはなかった。負けたくなかった。

ふと、考える。私と、親を殺してしまった彼等の違いは何なのだろうか？うちの親が、彼等の親ほど酷くないのだろうか？私は我慢強く、彼等は我慢ならないタイプだったのだろうか？生まれつきの気性によるものなのだろうか？どこが、どう違うのだろうか？　だから私は、実験したくなった。瑛子の、子供で。

私の結婚を、両親は反対した。相手は私より一回りも年上であるし、若い頃に付き合っていた女に産ませた子供がいたからだ。大学在学中に恋人が妊娠して、子供は産みたいが結婚はしたくない相手の意向に従ったようだ。彼はずっと、養育費を送り続けていた。

バツイチよりも更にタチが悪いと、両親は狂ったように反対した。私が彼等の反対に屈しないとなると、ヤクザを雇って殺してやるぞ。と、意味不明なことを、毎日、毎日、電話して来た。私は東京の大学へ進学してから、そのまま親と離れて暮らしていたが、もし、傍に住んでいたら、恐らく悪徳サラ金業者のように、しつこく押しかけて来ただろう。

夫と一緒に過ごした数年間、私はあの傷を思い出さずに済んだ。それ程に穏やかで、静かな生活だった。彼の愛情に包まれて、私は初めて女に生まれて来て良かった。と、思ったものだ。それまでの私は、自分の性にコンプレックスを持っていたから。

父は私が男であることを望み、髪はショートカット、ダンガリーシャツにジーンズ。少年野球の監督である父は、私を少年達に混ぜて練習させていた。私はどんなに頑張っても少年達より早く走ることも、ボールをキャッチすることもできず、自分が女であることを呪い、父の期待に応えられない自分を嫌った。

「先生は、凄くショックを受けました」

小学校六年生の時、担任が私達に渡したアンケートの一つの質問。

「今度生まれてくるなら、今と違う性別がいい？」

○か、×か？私は迷わず、○にした。それが、担任にはショックだったらしい。○はクラスに一人しかいなかったから。私、一人。

それから夫と出会う十年間、その考えは変わらなかった。初めて、初めて、本当の自分でいられる相手と出会えたのに。

「あぎゃんた、ろくでもなかばい」

両親は揃って、こう言った。

「絶対、結婚には賛成でけん。子供の生まれたって、抱かんけんね！」

母はいつもの顰め面でそう言った。あれは母が私にかけた、呪いだ

ったに違いない。三十過ぎでやっと待望の子供を妊娠して幸せの絶頂にある時に、あの事故に遭った。

あれは急に雨が降って、傘を忘れて行った夫を迎えに駅まで行った帰りだった。一つの傘に肩を寄せ合い、小走りで家に向かう。目映い光、それだけしか記憶にない。手で顔を覆った瞬間に、体が飛んだ。

私と夫は、酔っぱらいの車にはねられたのだ。意識が戻った時には夫も子供も逝ってしまって、私は二度と子供が産めない体になっていた。ベッドに固定されて、夫の最後の姿を見送ることもできない私に、母がこういった。

「あんたには悪かばってん、こぎゃんことになって良かったと思ってる。これであんたは、実家に帰って来どもん?」

私は両親の意向に沿って、実家の熊本に帰るには帰った。が、両親の家から離れた山の中の一軒家を購入して、そこに住んだ。そのことについては、彼等に一切の相談をしなかった。見上げれば、毘沙門天を奉る、由緒正しいお寺があった。その寺に因み、ここ一体を寺の下と呼んでいた。

「あそこに、住んでるから」

事後報告に彼等は烈火の如く怒ったが、私はもう平気だった。勝手に怒っていればいいんだ。

「気に入らないなら、ここには来なければいいでしょ?」

私は怒鳴り続ける母に背中を向けて、床を磨き続けた。古くさい家も、この数日間の私の掃除で黒光りするまでになった。この女は、母親ではない。子供を失った娘に、「良かった」と言うような女は、

母親な訳がない。そう思えば、彼女が私に投げつける言葉も平気になった。他人が私のことをどう思うと、知ったことじゃない。

「煩いから、早く帰ってよ」

縮んだ背中が、山道をすごすごと帰って行く。今日は帰っても、またあの女は来るだろう。予想通り、母は私がこの家に住み着いてから毎日やって来ては、あれがどうの、これがどうの、と、文句をつけて帰って行った。私はその都度「へー」とか「そう」とか気のない返事を繰り返し、やり過ごす。母とまとも会話する気はなかった。これからの人生は、私は母と呼ばれるこの女を無視して生きてやろうと考えていた。

瑛子が現れたのは、母が帰ってから直ぐの昼下がりだった。赤ん坊の声が、遠くからだんだん近くになって、私は縁側から外を眺めた。

白地に赤い花模様のワンピースを着た派手な女が、生まれて間もない赤ん坊を抱いて、ヨロヨロとこちらに向かって来る。

茶色の長い髪が風に煽られ、汗に濡れて顔にへばり付く。女は鬱陶しそうにそれを払って、私に気付いた。真っ赤な口紅が大きく広がって、久しぶり、と掠れた声が聞こえる。風に乗った粉っぽい化粧品の匂いが、こちらまで届いた。

「誰？」

「私、瑛子よ！」

「あぁ、瑛子か」

小学校の時に転校してきた、可愛い女の子が蘇る。ひらひらのスカートをはいて、茶色の長い髪を揺らしていた。直ぐにクラスの人気

者になった美少女。しかし、目の前の中年の女には、その面影はなかった。縁側に横に大きく張り出した尻を擦りつけるように座ると、子供を乱暴にそこへ置いた。

「瑛子の子供？」

「そう、よ」

額の汗をハンカチで拭い、そのまま首筋や、胸元、脇の下へそれを滑らせる。

「もう秋って言うばってん、熱っかねー」

「え、ええ」

子供はひっきりなしに泣き続け、固く小さく握った両手を、胸の上で激しく震わせている。子供は空気が漏れた風船のように、嗄れた不気味な声で泣き続けた。

「赤ちゃん、大丈夫？泣いてるけど」

「お腹の空いとっとやろたい」

瑛子はワンピースの前をはだけて、紫色に腫れ上がった乳首を、赤子の口に押し当てた。毟り取るように、激しく吸い続ける子供を鬱陶しげに眺めた瑛子が、おもむろに煙草を咥える。

「煙、平気なの？」

「妊娠しとる時から、吸いよるもん平気じゃろ」

煙草を吸わない私の家に灰皿がある訳もなく、私はツナをの空き缶渡し、瑛子は当然のようにそこへ灰を落とした。

「何か、冷たかもんでもなかっね？」

ずうずうしく言い放つ瑛子に麦茶を渡すと、急に嫌らしい笑顔になって、「ゴメンね、なんか催促したごたるね」と、態度を変えた。儚げな可愛らしい少女だった瑛子の顔は、どれだけしてきた苦労がはっきりと見て取れる。さっきから不自然な笑顔を作っているので、目尻の皺で白粉が捻れる。

「今日はどうしたの？」

「いや、スーパーでオバサンに会って、美奈子さんが帰って来とるって聞いたけん、様子ばたい、見に来たったい。なんか、大変かったとやろ？」

「う、うん、色々とね」

腹が膨れた赤子は、瑛子の腕の中で眠たげで虚ろな視線をこちらに寄越した。

「ばってん、いやー、久しぶりねー」

瑛子とは中学以来だった。中学を卒業した瑛子は、美容室に就職して、働きながら美容学校へ通っていたのだが、もともと体が弱く、また根っからの怠け者であるから、そんな過酷な状況に耐えられる訳がなかった。案の定、数ヶ月後に、バス停に佇む瑛子の姿を見掛けた。派手なワンピースに、厚化粧。どうやら瑛子の母親が雇われ

ママを勤める、市内のバーで働いているようだった。

瑛子とは、中学生時代に親しくしていた時期がある。中学校の近くに家を構えていたので、学校をさぼる不良達のたまり場になった。両親は市内の病院勤めである為、昼間は居ない。不良の瑛子と、真面目な私の不思議な関係は短期間続いた。母が、瑛子と仲良くするなと煩く言い始めたから。母はそれだけでは足りないと思ったのか、中学校の校長と、瑛子の母親に電話をした。

「不良に絡まれて、娘が迷惑ばしとりますけん」

受話器を荒々しく置いた母が、鬼のような形相で振り返った。

「あんたも、あぎゃん変かとと付き合いなさんな！」

瑛子の両親は、瑛子が幼い頃に離婚していた。

「うちのお父さんなんか、新婚旅行先の温泉で、梯子に登って女湯を覗いとって、そこから落ちて足ば折った馬鹿ばい」

瑛子はわざと陽気な笑顔を見せた。そしてひとしきり笑った後、

「私なんかと仲良うしとると、親が嫌がらんね？」

と聞いてきた。

「別に、親なんかどぎゃんでも良かけん」

「そぎゃんね」

そっけなく答えた私に、瑛子は満足げに頷いた。瑛子は知っていた。

私の母が、学校へ怒鳴り込んだことを。けど彼女はただ、私のその言葉が聞きたかったのだと思った。それから、瑛子は私を避け、結局卒業するまで、殆ど口をきかなかった。

次に瑛子と会ったのは、成人式の時。女の子達が振り袖を着る中、瑛子だけ六十年代のサイケな紫のスーツで現れた。パンツの裾がフレアになっている、一時期流行った格好だ。カールした髪を真ん中で別けて、有り得ない位に細く眉を描く。そしてバサバサと付け睫を揺らす。私が大学生の時には彼女はも一児の母で、それ以後、私達は二度と会うことはなかった。

「この子、何て名前？」

「麻里亜たい」

お下がりのブルーの産着を着せられていたせいか、そのキリリとした眉のせいか、麻里亜は男の子のように見えた。

「抱いて見んね？」

「え？」

拒否する理由もないので、私はその乳臭いまだぐにゃぐにゃと人間になりきってない麻里亜を、そっと腕に抱き寄せた。

「父親にそっくりばい」

「そうなの？」

瑛子も美人であるし、この子供もこれだけの器量なら、父親もさぞ

や格好良い男なのだろう。

「他にも子供がいたでしょう？」

「ああ、一番上はもう二十歳で、二番目は今年高校を卒業と、やっと自由になるって思ったところに、こん子のできてたい。もういっちょん好かん！」

「可愛い子じゃない」

「そぎゃん、思うね？」

瑛子がぐっと私に身を乗り出した、その仕草は粘り強い押し売りを思い出させた。何か、魂胆がある。都会で身につけた私の警戒心が、それを感じ取っていた。

「こん子の父親、出て行ってしもうたと」

「出て行った？」

「うん。まだ二十代の若っか男やったけん、子供のできてびっくりしたとやろ？一週間前に、とうとう出て行ってしもうたと」

「まぁ、無責任な男ね！」

「じゃろ？」

子供はそんなことになっているなんて知らず、可愛い寝息を立てている。時々慣れない私の腕の中で、もぞもぞ動くのが面白い。

「私も困ってしもうてたい！仕事も見付けんまんし、お金はなかし。けど、ぎゃん小さか子のおれば、仕事も見付けられんし」

「まぁ、そうだろうね」

瑛子が、麦茶をゴクリと喉を鳴らして飲み込んだ。それは、今から大変なことを吐き出そうとする為の、助走のようなものだった。

「だけん、少しの間だ、こん子ば預かってくれんどか？」

何を言い出すの？そんな表情で瑛子を見詰めると、薄笑いで麦茶を啜っていた。

「あんた、子供を亡くして直ぐなんでしょ、良かたいね。こん子ば少し貸してやっけん。母親の気持ちになんないよ」

「帰って」

ふん、瑛子が鼻で笑った声が聞こえた。私はそっちへ顔を向けることができない、恥ずかしさと悲しさと怒りと、そんなごちゃまぜの感情が、胸の中をグルグルと熱く掻き回しているのだ。

「また、来っけん」

暫くして振り返ると、坂道をヨロヨロと下る瑛子の背中が見えた。縁側に立って、暫くその姿を眺めていたが、涙が余りにも流れて来るので、荒々しくポケットを探ると皺くちゃのハンカチが出て来た。

「馬鹿にして」

思わず洩れたその言葉は、私が隠していた本音だった。
私は二度と子供が持てない。その言葉は、女として何か劣っているような、女の幸せが一つ足りないような、完全な女になりきれない中途半端な自分を表す言葉だ。
子供を持つ女達が、子供のいない私をどう思うのだろう？「母親にもなれない女」と蔑むのだろうか。「馬鹿にして」子供を持つ女達のずうずうしさに出会う度に、そう感じていた。しかし、その感情を認めることは、もっと悔しい。

「馬鹿にして。母親が何だって言うのよ！何か特別なの？」

瑛子が残したツナ缶をゴミ箱に放り込むと、私は暫く震える体を抱き締めた。

第二章

次の日の朝、母が現れた。彼女はタッパーに詰めた漬け物やら、煮物やらを、大きな風呂敷に包み、父と連れだって現れた。

「これは、一回火ば入れて、冷凍すれば良かけん」

母が自慢げに作った料理の講釈をたれるのを、私は黙って頷きながら聞いていた。母は歪んだおかしな母親だが、料理は上手い。父は私が入れたお茶を飲みながら、微妙な笑顔で頷いていた。油絵の具が付着した、ジーンズとシャツを着ていることから、絵を描いている途中だったのだろう。

父の愛情にはムラが有る。自分の機嫌が良い時には饒舌に語り、愛情表現をする。しかし、そうでない時は幼い子供にも手を挙げ、足で踏みつける。父がどんなに笑顔でいても、八歳の時に腹を踏みつけにされた恐怖を忘れることはできない。

今は、描いてる途中の絵ののことを考えていのだろう、恐らく、出しっぱなしの絵の具が乾かない内に、家に帰りたい筈だ。

「この家、大丈夫や?」

父が口を開いた。

「大丈夫」

畳は日に焼けて、所々ボロボロだし、建て付けが悪くて雨戸を閉めるのに一苦労だ。しかし父は、そんなことは知りたくない。父は自分の手を煩わせる人間が嫌いだ。自分が自発的に面倒を見る分は良いが、自分から率先して善事を行うタイプではない。それでいなが

ら、他人から善人に、人格者に見られたいのだから勝手だ。

「元気や？大丈夫や？」

東京に住んでいる時から、幾度となくそんな電話を受けた。子供の頃は、都会での暮らしの大変さを訴えていたが、父の話題は自分の興味がある絵の話題だけ饒舌になり、訴えた私の話には生返事を繰り返した。

「じゃ、また来っけん」

父の合図で、母が腰を上げた。

「お母さん、私の事を同級生に吹聴して回らないでよ」

「なんがね？」

「瑛子がここに来たよ」

「良かたい！事実やろーもん、しでかしたあんたが悪かったったい」

母は憎々しい表情で、そう言い放った。それが傷ついた実の娘に言う台詞だろうか？呆然と立ち尽くす私を置いて、年老いた両親達は帰って行った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2783p/

親を殺し損なった、子供

2010年12月10日17時50分発行